

万葉の川心まんのかわごころ

雁を詠めるかりよ

横浜市立矢向小学校教諭 澤井園子

(巻第十一 二二三五番歌)

おし照る 難波堀江の 葦辺には

雁寝たるかも 霜の降らくに

横浜の秋は長い。九月に入ってもプールで泳ぎ、汗をかきかき運動会の練習、練習。熱中症対策を呼びかけることもあれば、長雨のときもある。過ぎ去った夏休みの充実感と心残りを引きずりつつ、いつになったら涼しくなるのかと思っていると、ある夜、虫の音が響き、藍色に染まる空にひととき輝く月が上ってくる。家への道を急ぎながらも、しばし「秋の月」をめで、月光を浴びる。春も夏も変わらずにそこにあつたはずなのに、美しさと存在感が圧倒的に違う。何やら体の中に生命力のような「わき上がるもの」を感じる。同時に、浄化されていくような「静けさ」も。母はなぜか、秋が来ると淋しいという。子は祭りでうれいとい、友はやたらに忙しい季節という。また、それぞれの秋がやって来る。

雁は、万葉の昔にも群れで飛来し、初雁は秋の訪れや収穫期を告げる。「陽の光に輝き渡る難波の堀江に、夜は霜が降りる。その葦のほとりに雁は寝たのであるうか。霜が降りて寒いだらうに。」九七七番歌を読むと、奈良から出て生駒山をようやく越えたとき、難波の海が一面に照り輝いていたので、その光景が難波の美辞となったと分かる。難波は、航路を示す標識の「みをつくし」とともに詠まれることでも知られる。「仁徳紀」十一年の条に、「宮野北に運河を作り、難波江の水を大阪湾に入れ、堀江と名づけた」とあり、



現在の大阪市北区中之島のあたりを歩いた(写真)。まさに水の都。川と橋と堀を縦糸に、商いが緯糸で織られたきらきら豪華な錦の街。初めは遠目に見ていたが、道頓堀にビリケン、粉もん(たこやきお好み焼き他)、住む人のあふれるパワー、放っておけない人情味と話の面白さには、あつという間に引き込まれる魅力がある。

雁の歌の多くは紅葉、霜、鹿の声、鶴や雲隠れとあわせて詠まれる。春に北国へ帰るが、大空を駆けて遠く旅するので、音信を運ぶ鳥とも言われ、遠く離れた妻に思いをはせる歌がある。また、雁の声(かりがね)が詠まれることも多い。雁にあてる万葉仮名として「切木四」と朝鮮韓国から入ってきた四つの木片を投げて遊ぶゲームの字をあてているのも興味深い。雁は秋。川に舞い降り、穂の出た葦の隙間から、人の心を静かに秋に染めていく。

読書、ハイキング、スポーツにコンサート。秋の夜長に「ひとりかも寝む」のはもったいなく、秋は恋・・・それは「今は昔」だが、おいしいものをたっぷり食べて、川辺を走り、月を眺め、鳥の声・虫の音に、秋を満喫していきたい。